大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

性同一性障害の社会学：性別脱構築の視点(2006年度第4回コロキウム)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐倉, 智美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004907

2006年度　第4回コロキウム

性同一性障害の社会学
—性別脱構築の視点—

佐倉　智美

世の中では容易に「私」のことを「女」や「男」と判定できることになっている

◆頭の体操“性別クイズ”!?

おはようございます。佐倉智美です。今日はどうぞよろしくお願いします。

早速ですが、ひとつ頭の体操です。お手元の資料の冒頭にも書いてありますけど、「周りを見てください。あなたと同じ性別の人は、どのくらいいますか？」。……どうですか？　と言っても、今日のメンバーは一般的に表現して全員女性なので、あまり盛り上がりませんね。参加者公募型の市民講座などだと、いわゆる老若男女が入り混じっていて、けっこういいアイスブレイキングになるんですが。

ともあれ、このように言われれば、女性として生きている人は通常、同性である女性を周りに探します。そしてその作業自体は当然のこととして、さしたる疑問は挟まれないわけです。それだけ私たちは、女性・男性、あるいは同性・異性といった概念を、あたりまえのものだと認識し、強く内面化しているということになるのではないでしょうか。しかも周りにいる他者が女性か男性か、それはパッと見たらわかる……という前提もまた、広く共有されていますね。

つまり自己や他者の性別というものが、二元的に明白なものであることを、社会の共通認識として、私たちは受け入れているわけです。

このことが象徴的に表れているのが、いろいろな書類によくある性別欄で、たとえば何かの申込書なんかには、このような［男 女］に二者択一

でマルをつける欄がたいてい設けてあります。この欄のつくりのコンセプトは、すべての人はどっちかひとつにマルがつく—ですね。よもや両方にマルがついたり、どちらにもつかなかったり、あるいはどちらでもないところにマルがつくなんてことはありえないという。

◆「該当するほうにマル」!?

ただ、私などはその「よもや」に該当するケースの一例なわけですね。

いゃまぁ私もかつては、ご多分に漏れず、何のギモンもなく［男］のほうにマルしていました。しかしその後、詳しくはこの後お話ししますが、いろいろ男としての人生が煮詰まりまして、現在では一般的に女性と認識される生活をしております。

世間では最近、そういうケースに関して「性同一性障害の人」とかいう言い回しで理解が進んでいますね。厳密には性同一性障害という医療概念よりも、この場合「トランスジェンダー」という言葉を使うほうがいいのですけれども、用語として一般にはかなり知名度が低いのが難点です。

ともあれ、そういう生まれたときと違う性別で生活しているということをしております。

そうすると、やはり二者択一の性別欄を前にすると、スッキリとはマルがつけられないですね。ケースバイケースでどちらかを選んだり、こうした性別欄によく添えられている「※該当するほうにマル」という文言を逆手にとって、どちらにも該当せぇへんからとばかりに空欄で出したりすることもしばしばです。……まぁ空欄で出しても、係の人に勝手に［女］のほうにマルをされちゃうことが多いですが。

でもやはり健康診断とかに行くと、どうしても身体がからんでくるので、男のほうにマルをせざるをえない。変に女のほうにマルをして、「子宮がん検診のコースはこちらです」とか言われても、「いや、いいんです」とか、そのへんがややこしくなるところです。

一方ショッピングセンターの会員カードをつくるときなんかは、もうそれこそ空欄で出して、女にマルをされてももちろんかまわないし、こちらももう確信犯で、女にマルをして出してますね。ショッピングセンターと

しても、変にネクタイのダイレクトメールを送るより、化粧品とかのダイレクトメールを送ることになるほうが、向こうにとってもいいでしょうし。

微妙なのは、公的書類がからむ関係です。いわゆる戸籍上の性別というのが、やはりいろいろついて回ります。例えば海外旅行に行く場合なんかは、パスポートにどうしても性別情報が記録されていますよね。それと申込書にある本人の一見した性別に齟齬（そご）があると、はたしていいのか悪いのか、悩ましいところですよね。

一度、海外旅行に行くときに、性別の欄を空欄で出したら、旅行社のおじさんに勝手に女のほうにマルをされて、本社に「女性１名、ちょっと急なんですけど」とか電話していて、「女性１名か」と、ひそかにほくそ笑んでいたのです。でも出発当日、関西空港のカウンターでチェックインしようとパスポートを出したら、なぜか15分くらい延々と待たされちゃいました。いったいなんで!? と思って推測をめぐらせたんですが、もしかして女で受け付けていたのに、パスポートの情報が男なので、コンピューターがエラーになって止まっちゃったんではないかなと。旅行社のカウンターだけですんだらまだしも、最悪、関西空港全体のシステムがダウンしたらおおごとですよね。

もしかしたらそんなことになるのではないかと不安を抱きながらマルをする機会は、やはり少なくないです。だから性別欄の存在は気苦労のもとです。それだけ、この従来は顧みられてこなかった女か男かでは割り切れないものがあるケース、そのことについてこれから考えていく必要があるのではないでしょうか。

いわゆる「性同一性障害」って……？

◆「①望まぬ性別での生活における不満足と社会との不調和」

いわゆる性同一性障害者、つまりトランスジェンダーですね、そのライフ・ヒストリーというのは、もちろん十人十色で、ひとりひとり違いますし、決してこの佐倉智美がMtF（Male to Female 男性から女性へ）トランスジェンダーのスタンダードというわけではないのですが、そうやって

いろいろな当事者が自らの来し方を語るなかには、やはりある程度普遍的に言えることが含まれていると思います。

おおむねトランスジェンダーには、いろいろまわりと問題が起きて苦悩する、そのときそのときの段階が3つあって、1番目は望まぬ性別で生活しているときのいろいろな悩みです。2番目は、よし性別を変えようとなったときに、変える過程のいろいろな問題。3番目として、変わったあとの問題になります。このそれぞれの段階で、多少悩みの次元が違ったりもします。

この1番目の、望まぬ性別で生活しているときの問題点というのは、大きく分けると、やはり本人の不満足と社会との不調和という点に集約されると思います。例えば男の子だと、身の回りから人間関係まで、男の子向きというのがあてがわれるわけですけれども、それに対して満足がいかない。こっちじゃだめだ。人間関係とかも、男の子どうしというのが望ましいとされるけれども、何かそこでうまくやっていけない。「ボク、どうして男の子なの」とかいうつぶやきを発することも、まあ、ある。

言ってみれば性別の境界線があって、こちら側へ入っているから何か自分の好きなものが選べない。人間関係で、好きな友だちなんかも、相性のいい相手が選べない。もしも性別の壁のあっち側に自分が配属されていれば、すべてうまくいったのにという感覚をもちながら、望まぬ性別で生活していることが嫌だということです。

だいたい子どもの頃なんかは、遊びやおもちゃなんかで自覚するケースが多いようです。私なんかは、だいたい物心がついて最初のころ世の中を見ると、どうも女の子と男の子という区分があるらしい。自分はどっちなんだろうと思って、親に「僕、男の子、女の子、どっち」と聞いたら、母親が即座に「いや、男の子よ」と言うので、「いや、なんでなんだろう、いつ決まったんやろう、誰が決めたんやろう」と、すごい不条理な思いをそこで抱きました。こういうのは、いま性同一性障害と診断されるような人にだいたい共通して言えるようです。やはりその頃すでに、できれば女の子のほうに入っていればよかったのになという思いはあったわけですね。

とにかくもう、決定はやはり覆せないなという濃厚な気配も感じたので、しようがないから男の子でやっていこうと思ったのですけれども、男の子どうしで遊んでいても、やはりなかなか面白くないとか、ほかの男の子と上手に遊べないという問題がありました。

家で１人で遊ぶようなことも、当然機会が増えるのですけれども、やはり男の子だから外で真っ黒になるまで遊ぶのがいいというような親の期待とか、それに反することで、親といろいろもめるという軋轢（あつれき）。その親の期待というのはわかっているけれども、自分がそれにうまく応えられない。親とか、あるいは社会、学校に行けば先生とかもいるし、社会全体で男の子がこうするのが男の子としていわば価値が高いとされることができない、それに当てはまらないということで、一種の自己肯定感、self-esteemがそこでどんどん下がっていくということもあります。だいたい自分に自信がないとか、自分に対する評価が低いという性同一性障害者は、やはり多いです。そこにはそういう、本来の性別ならこうあるべきだという望ましさに自分は合っていないということで、評価が下がるという構造があるのです。

当然男の子どうしのなかでうまく遊べない、何か力が弱い、色白なやつが１人いるというと、格好のいじめの対象になったりして、やはり小学校のときとか、よく男の子のごんたなグループからからかわれるとか、極端な話、プロレスの技の掛けられ役をさせられるとかいう、言ったら身体的ないじめとかも、ままありましたし、みんなが野球やサッカーとかするなかに、嫌々参加するなかで、当然うまくプレーはできないし、みんなが興味を持っていることに自分は嫌々参加をしているという疎外感なんかがあって、なかなか満足のいく生活ができないということがありましたね。

私なんかは、中学校に行くと、わりと文化祭の劇の脚本を書くようなことで自己表現するというので、あからさまにいじめられたりすることはなくなったのですけれども、いわゆる異性への関心が芽生える思春期ということもあり、やはりいろいろ悩みはありました。

まず、中学校は制服があって、当時の詰め襟の学生服を着ても、なんかちがうなぁ、似合ってない、自分じゃないなぁ、という感覚が漠然とあり

ました。髪型にも校則があって、男子はまゆにかからない、耳にかからない、襟にかからない。それに沿ってやると、だいたい髪型は決まってしまうのですけれども、それに合わせて髪を切った自分というのが、やはり好きになれなかった。そういう男子の校則に合った髪にした自分の顔が、一種気に入らない。いちおう、自分としてはこれぐらいはしたいという髪型はあったのですが、仮にそれを実行したとしても、例えば女子の髪型を定めた校則になら引っ掛からない。校則の女子規定はクリアしているのに、男子だから男子規定が適用されるが故に校則違反になってしまうということで、結局これも性別の壁があって、こちら側ではなくてそちら側にいれば自分の希望が認められたのに、認められないという現象が起きてしまうわけですね。

あと進路の話で言うと、高校選びのときでも、クラスメートの女子が見ている女子校のパンフレットの雰囲気を見て、なんとなくいいなと、何かぴぴっと引かれるものがあるけれども、当然女子校だから、進路選択の候補としては最初から論外なのですね。先生がそこそこ名門と言われる男子校のパンフレットを「これとかどうや、どうや」と勧めても、何か違うなという感じがして、結局公立の共学校をもっぱら第一志望にするという選択になってしまうわけです。

だいたいこういう、望まぬ性別での生活をする期間というのは、まあぶっちゃけ、いつ生まれたかによって多少違うと思います。最近は、情報がある程度行き渡っているので、例えば5年生の女子ですけれども、自分は男子のほうがいい、なりたいと思うんですというような相談がインターネット上に流れてくることもあります。私なんかはそれを見て、そんな小学生の頃から具体的に悩まないといけないのが、めっぽうたいへんだなと。私なんかは、小学校の頃は、よくわからないままに過ごしていましたから、ある意味、深刻に具体的に、こうなのにと悩むことがなかったという言い方もできるのですけれども、逆に言うと、早いうちから自分の悩みの正体が何なのかがわかるのは、やはりいいかなと。小学校の時点から、ああ、そうか、自分は女の子に生まれたけど、男の子になれば、うまくやっていけるんだと把握できれば、あとはそれこそ、その後の高校選び、大学選び、

あるいは将来職業はこういうのを目指そう、だから資格はこんなのを取っておこう、そのためには学校はこうだ、みたいな作戦は立てやすいですよね。ある程度早くから、望みの性別で生きるにはどうしたらいいかという対応もできるので、結局望まぬ性別での生活の期間が短くてすみます。そういう意味では、やはり最近の状況のほうがいいんでしょうね。

私なんかは、30有余年間もんもんと、自分はなんでこんなに人と違うんだろう、なんでしんどいんだろうという、もやもやを抱えながら過ごしました。だから、人によってその期間は違うのですが、30有余年悩むと、その間やはり職業選びであるとか、あるいは学校選びであるとか、いろいろと支障をきたすというか、やってみたけれども何かだめだぞ、うまくいかないぞというのにぶち当たる機会も増えるわけですね。私がこの期間をふり返って、一番の損失、失ったなと思うのは、やはり友人関係とか恋愛にからむことでしょうかね。

あ、その前にファッションでいうと、制服も似合わないと思っていたという話をしましたけれども、私服に関しても、例えば大学生のときに、ファッション雑誌とかを見ていろいろ研究して、女の子にモテるにはこんな服を着たらいいかなと思って買いに行って、いろいろモデルさんの着ているコーディネートを着てみるけれども、やはりいまいち似合っていない。これはなりたい自分じゃない、これは理想の自分じゃないけれども、自分の限界はこうかなというような、あきらめにさいなまれることになって、結局は適当な格好をしてすますということになりました。

これもやはり当時から女物のファッションを楽しめていたらよかったのになという、後年において１つの悔恨を抱くポイントであります。ちなみに、そのときの一種のルサンチマンが回り回って、いま、ついつい若づくりをしてしまう原因になっているのかもしれません。お店で「そのミニスカート、おまえ、まずいやろ、その歳で」とか、心の中の天の声を聞きながら、でも気に入ったから買うことに。それでレジへ持って行って、レシートを見たら、項目名にヤングファッションとか書いてあって、苦笑することもしばしばです。

ただ、このようにファッションは後年になってからのリカバリーが、ま

だしもそれなりにしやすいのですが、やはり友人関係ですね。

まず私の場合、恋愛対象、性的指向は女性だったので、それは当時男の子としては差し当たりは問題がなかったわけです。よくゲイの友人なんかと飲み会で盛り上がると、中学・高校の頃、友だちが好きな異性の話をしだすと、疎外感を覚えた、ついていけなかったというような話が出ます。好きな芸能人の話で、「松田聖子、いいんちゃうか」「いや、最近売り出しの堀ちえみや」とかいうときに、「自分が好きなのは、た、た、た、田原俊彦。ああ、言えない」とかなってたらしいです。でも私の場合はそこで「いやいや、石川秀美が」なんて話を合わすことに特段の無理はなかった。

ただ私の場合は、クラスメートの男の子が、「3組の何々ちゃん、かわいい」とかいうのと、何かちょっと感覚が違うなというのもありました。おそらくは、いわゆるレズビアンの人の感覚に近かったんだと思います。女性として女性を好きな感覚だったのでしょうね。それが、ほかの男の子の、要するに男として女の子に対する世間の関係性が内面化した「あの子、かわいいな」とは、一種の違和感があったんだとは思います。

それで実際、かなり恋愛モードで夢中になっていた女の子もいたのですけれども、それとは別に、何かいろいろな女の子に心引かれるということが、特に高校時代をふり返るとよくありました。高校時代を中心に描いた自伝的な内容の『女子高生になれなかった少年』という私の本もあるのですけれども、その登場人物を見直してみても、女性が異様に多いです。結局、現実にふり返って、高校時代に印象に残っている出会いというと、やはり女子に比重があるようです。現実に、当時はいちおう男ですから、男友だちとそれなりにうまくはやっていたのですけれども、やたら女の子に心引かれる。それは当時男の子だったので、やはり気が多いのかなと、自分は女たらしなのかなとか、実際にいわゆるラグビー部のキャプテンのような、モテモテタイプでもないのに、いろいろな女の子に関心を示すので、逆に何か、いまの言葉で言うと、「きもい」とか、「きしょっ」という感じですかね、そういうふうに思われて、いろいろトラブルになったこともありましたが、いま思うと、やはりあれは同性として、同性の友だちになりたい気持ちだったんじゃないかなと。

つまり、同性として仲良くなりたい、いろいろと話をしてみたいという感情を、いろいろな女の子に対して抱いていたけれど、残念なことに、当時は自分は男の子のほうなので、当然その相手が異性になってしまう。異性であるが故に、アプローチするとしたら、異性どうしとしての一種の手続きを踏まなければいけない、何か恋愛のような手続きを通さなければいけないから、逆に、みんなと仲良くするには、モテないといけないというような思い込みによって、いろいろトラブルとかもあったし、もしも自分も女の子であれば親友になれたかもしれない相手に、異性としてしかアプローチできずに、親友になり損ねた。そういう人間関係上の損失はやはり大きかったなと思います。

◆「②性別を変える過程の困難と社会との摩擦」

望まぬ性別での生活では、そうやっていろいろもやもやとした悩みを抱えながら、何かうまくいかない、しんどい、つらい、苦しい……。ついに社会人になって何年目かに、私は煮詰まりました。ちょうどその頃、埼玉医大が、性同一性障害治療のために性別適合手術を始めますよという報道があって、性同一性障害についての説明が新聞に載ったりしました。「身体の性別と、心の性別がくいちがい、そういう不一致が、いろいろ社会と問題を引き起こす状態」とか出て、「ああ、これや!!」と。それで、一種自分自身、目から鱗が落ちるというか、そうか、それだったのかと。身体は男として生まれて、男として生きていたけれども、内面が女性らしい内面を持っているからだと解釈すると、子どもの頃からのいろいろな違和感とか、うまくいかなかったことが、全部説明がつくなと、すごく納得がいった思いはしました。しかも、そういうことは、自分だけが特別に変だったのではなくて、そういう悩みの人はじつはたくさんいたのだと。よし、じゃあ、そういうことなら、本格的に女性として生きれば、うまくやっていけるのであれば、そうだ、女性として生きればよかったんだという一種の開眼でもあったわけですね。

ただ、性別を変えるというのが、また一筋縄ではいかないのです。例えば、いま女性として生きている方が、もう明日からばっちり男性として生

きてみてください、と言われても、どうでしょう、みなさん。男性がこういうときにどうするかとかいうのわかります？ ネクタイの締め方とかも、どうですかね、やはりわからないというケースが少なくないのではないでしょうか。たまにドラマなんかで、奥さんが結んであげているというシーンもありますけどね。あぁそう、そういうことがあるので、女性が男性になるケースというのは、その逆にくらべて多少その入り口ではやりやすいことがあるのですね。男物の下着を買いに行っても、奥さんがだんなさんの分を買いに来たと思われるのが関の山ですから、そのへんは楽なのですけれども、男性が女性ものを買おうとすると、それはもうしんどいですね。男性が女性ものの下着を買おうとしている。変態。何か変な目で見られますよね。その時点ですでに厳しい視線がありますね。だから私なんかは、とりあえずの着るものとかは、通信販売でそろえて、化粧品なんかもとりあえずそろえて、ストッキングはどう履いたらいいのかなとか、そういうところからこっそり試行錯誤を始めました。当然そういう女性として、その年齢で身に付けているべき知識とかがないわけですね。言ってみれば、経験値はゼロでレベルは１なのです。第４ステージまで来ているのに、なんで経験値がゼロで、レベル１なんだということになるわけですよね。それを一気に、急速にリカバリーしないといけない、リハビリテーションと言ってもいいかもしれません。本来その年齢で身に付けているべき女性の知識、経験を身に付けないといけない。しかも情報が少ないなかで、やはり最初はカミングアウトなんかも、おいそれとできないので、誰にも相談できないまま１人で試行錯誤するということが多くて、けっこうたいへんですね。

やっとこさ上下をなんとかコーディネートして、化粧もしてみた。じゃあ、ちょっと外へ出てみようと、頑張って外へ出てみるのですけれども、やはりまだ何か変な感じなんですよね。男性が女装しているなと見破られてしまって、女子高生の集団から、「見て見て、オカマが歩いているよ」とか。関西の女子高生は、こういうときノリがいいのですよね。言われて、ああ、しまったなと思って逃げ帰るというようなことが繰り返されることが多かったりします。そういう外出中のトイレも悩ましいですね。

まわりから厳しい視線が当然あるという時期とだいたいパラレルなのですけれども、その頃は、まだ本人が罪悪感を抱いています。性別を変えたい、変えようとなったけれども、やはり変えるなんてだめなんじゃないだろうか、これでまっとうな人生から道を踏み外すんじゃないだろうかという、自分自身に対する罪悪感、言ったら性別二元的な規範のなかで生きていた自分が、まだまだ男は男らしく、女は女らしくするのがいいというところから脱却できていないが故に、そこから外れようとしていることに不安とかを抱いているわけですね。そこを乗り越えて、本来の自分、本来の性別で生きている自分が好きになれる、認めてあげられるようになるまでには、やはりある程度の時間もかかるでしょうし、やはり自助グループとかに出掛けていって、同じような悩みを持っている人と話をしたりして、一種のピア・サポートですね、そういう過程を経て、自分を受け止めていくということがどうしても必要になってきます。

そういったプロセスにかける時間として、私なんかは１年くらいの期間が必要でした。人によって多少期間に差があると思います。身体的な条件とかが、やはりどうしても厳しいというような人は、いわゆるフルタイムで望みの性別になるというのはやめておいて、週末だけ女装をするという、自分の置かれた状況のなかでのベストを選ぶとそうなってしまうという方もいらっしゃいます。そのへんは人によって様態はさまざまですけれども、仮にフルタイムを目指してトランジションをおこなった場合、やはり最低１年くらいはかかるとみていいのではないかと思います。

そんなこんなで今日では私もそれなりに女性として自然な立ち居振舞いが身に付きましたが、これはつまりその性別を習得するというか、自ら性別に合わせた規範を守らせるというのは、やはり社会のなかで生活するプロセスのなかで身に付けるものではないかなと。逆に言うと、女性らしいしぐさとか、女性らしい表情とか、そういう全体像は、やはり生まれつきではなくて、社会のなかで生活するなかで身に付くものであるという証拠でもあるかと思います。

あと、カミングアウトがなかなか難しいという話ですけれども、男として友だちや知り合いになっていた相手に、「いや、じつは今度女になりま

す」と、やはり言いたいわけですね。そうなった自分を認めてほしい。そういう自分を認めてもらったうえで、その相手と関係を続けたいというのがカミングアウトですけれども、やはりなかなか、わかってほしいけれども、わかってもらえなかったらどうしようと。

性同一性障害、トランスジェンダーや、同性愛に関してもそうですけれども、カミングアウトされたら引いてしまう人というのが、まだまだ多いのではないかなという不安はぬぐえませんから、カミングアウトをいつするか、あるいはしないか、したあとどういうふうにしていくかとか、それが、自分自身がそのあとどうしたいかとも相まって、なかなか悩ましい課題になってきます。

友だちとかはまだしやすいですけれども、特に親が難敵なんですよね。だいたいマイノリティというのは、民族的なマイノリティとか部落差別の問題だと、親も味方になってくれるのですね。仮に学校でそれが原因でいじめられたりしたら、親が味方になって対処してくれるのです。けれども、例えばちょっと女っぽい男の子が学校でいじめられてきて、親に訴えたら、親父さんが出てきて、「いや、それはおまえがいつもそんなに、ナヨっとしてるからじゃ。よし、俺が根性をたたき直してやる」というようなかたちで、逆に親からセカンドいじめを受けるようなことにもなりかねない。それだけこの、親が味方になってくれない傾向は、セクシュアルマイノリティを孤独に追い詰めることが多いのも悩ましいですね。もっともカミングアウト後には、特に母親などが、あのとき自分があの薬を飲んだから……などと自分を責めるようなこともままあるようです。単純に薬を飲んだからとは限らないはずなんですけどね。

ともあれ、親、親戚関係へのカミングアウトは難しい。何かゲームの例えが多いですけれども、だいたいカミングアウト・クエストの、最後の悪の大ボスが父親だったりすることは、いわばストーリーとして定石です。クリアできたらいいですけれども、父親と対決でゲームオーバー、あるいはそれを避けてプレイ中断したままといったケースがけっこう、いろいろな事例のなかには散見されたりします。

逆に、次の段階のカミングアウトですね。性別を変えた後のカミングア

ウトというのは、だいたいその変えた後の性別で人と新たに知り合ったりしてますから、新たに知り合った人からは、まるっきり女性と思われたりしている場合に、「じつはトランスジェンダーでして」といつ言うかとか、あるいは言わないかとか、どう言うかとかがまたけっこう悩ましかったりします。まあ、カミングアウトのコツは、けっこうどさくさでさりげなくかなと、私なんかは思っているのですけれども。

◆「③性別を変えた後の社会との齟齬と制度の壁」

こうした性別を変えたあとのカミングアウトというのは、ある意味希望の性別での生活が叶っているがゆえなわけで、ぜいたくな悩みだったりもするのですけれども、このタイミングでピンチが訪れるのは、だいたい身体がからむときと、書類がからむときです。最初に性別欄のところでも言いましたけれども、やはり健康診断とか、身体そのものを診てもらうときとかは、やはり生まれたときというか、遺伝子系に基づくというか、そういう性別を申告せざるをえないけれども、それが見た目と違っていると、向こうが混乱したりするので、けっこう面倒くさいやりとりが増えてしまうのです。健康保険証は性別欄がズバリありますよね。パスポートはまだ外国に持って行く書類なので、ＭとＦ、アルファベットだけなんですが、たいがい国内の書類は漢字で男、女と書いてあります。漢字というのはやはりすごいですね。中国四千年の文明の英知が詰まった表意文字なんですねぇ。やはり字からオーラというか、気ですね。男と書いてあったら、男という字から気が出ているんです。だから、それこそ旅行社のおじさんが、「ああ、女性１名で」というふうに、Ｍだと見落とされてしまうのに、さすがに男と漢字で書いてあると、「ええっ」となるわけですね。

で、その点まぁ、国内旅行はパスポートもいらないし、本来は気がねなく行けるはずですよね。実際に普段の買い物とかは、女物の服とかも、べつに何をとがめられることもないし。そうそう、今日ここへ来るときの電車も、女性専用車両に乗ってきました。ただ、服を脱ぐと、たいへん。いちおう性別適合手術は、私の場合、まだです。最近は、やはりいわゆる手術をした後の結果のその状態の身体には、ロマンを感じますが。だから魔

法使いがあらわれて、願いを１つ何でもかなえてあげますとかになったら、じゃあ、身体をいわゆる女の身体にお願いしてみようかなと思うのですけれども、手術は痛いし、リスクもあるし、そういうことを考えると、私の場合は後回しになってきたので、まだだし、もしかしたらしないかもしれない。だって、手術をする部分というのは、見せて歩きませんからね。見せて歩いたら、そっちが犯罪やし。なので、通常ほかから見られる部分ではないので、まあ、いいかと。それよりは社会的に女性として認識されて、女性として生活できれば、まあいいかと。私の場合はそちらが優先になっているので、まだなのです。

トランスジェンダーの人でも、人によっては、身体こそが違和感の根源で、男として暮らしてもいいから、オチンチンだけは手術して取りたいというような人もいるので、これまた人それぞれなのですね。だから、手術がすんでいるかどうかというのは、仮に性同一性障害の診断が下りている人でも、一概には言えなかったりします。

そんなわけで私の場合は、服を脱ぐと、もうあれですね、胸には詰め物で、オチンチンはまだあるというところもありますし、ついでにおなかも出ていると。いかにも40代男性という感じになってしまうので、なかなか裸になった状態を人にさらしたくはないし、例えば女湯でさらしてしまうと、即刻110番ということになってしまうので、温泉旅行なんかはストレスの種というか、肩が凝って帰ってきますね。普通は温泉って、リラックスして、肩凝りを治して帰ってくるものだけど、うーん、これじゃ意味ないじゃん！ということでパスポートが不要な国内旅行でも、やっぱり気は遣わざるをえないのが現状です。

そんなこんなで、性別を変えたあとは、書類とか身体にかかわるところがやはり、最後に残ったネックとして、逆に気になる点として、本人のなかでクローズアップされてくるという話でした。

ということで、このいわゆる性同一性障害の人、あるいはトランスジェンダーとして生きている人が、どういうライフ・ヒストリーを生きてきたかのなかで、ある程度共通して言えるのは、①望まぬ性別で生活しているときは、いろいろ満足がいかなかった。まわりとうまく調和しなかった。

②性別を変える最中は、やはりいきなり性別を変えるというわけにはいかないので、途中踏むプロセスのなかで、いろいろな混乱がある。男は男、女は女と思い込んでいる社会と、いろいろ摩擦が起きたりする。③いちおうは性別が変わった後は、特に気になってくるポイントとして、身体がからむ場合、書類がからむ場合というのがある……ということです。

とはいえ、このトランスジェンダーの人が、③の性別が変わった後、たいがいの人が言うのは、いろいろたいへんで、身体や書類がからむとピンチも訪れるけれども、やっぱり今がいいわと。やはり望みの性別になった自分のほうが、自分が自分として好きでいられる。自分を認めてあげられる。まわりとの関係も、その性別で認識されることで、うまくいく。友だち関係とか、仕事関係がうまくいく。それも含めて、そういうふうになった自分が好きと。見た目、ファッションなんかも含めて、こっちのほうがいいということですね。だからこそ本来の、本人が思っている生き方というのが認められることは、非常に大事ではないかと思われます。

えー、いささか時間が押してますけれども、次にここでセクシュアルマイノリティについての基本を再確認してしまいましょう。

あなたの性別は？

◆セクシュアルマイノリティの基礎を確認

「あなたの性別は？」と聞かれると、先ほどの性別欄で言うと、女か男かにマルをするだけですけれど、これはどっちかに単純に該当しないようなややこしい人がいないという前提でできているわけです。

一般にセクシュアルマイノリティと言われるのは、性的に、つまりセクシュアリティが多数派と呼ばれている基準から見て、ちょっと違う。だから、セクシュアリティに関する少数者、性的少数者、セクシュアルマイノリティなんですね。そして、ひとりひとりは自然なありのままの存在であるはずなのに、そんな多数派の基準から見て普通じゃないとされるがゆえに、いろいろな悩み、葛藤に直面させられるわけです。だいたい大まかに言ってインターセックスの人と、トランスジェンダーと、あと同性愛の人

というカテゴリーがあります。

例えば、女と生まれた人は、だいたい生まれたときに、身体を基準に「女の子ですよ」とか言われて、出生届も女で出されるわけですね。従来は、そういう人は当然、本人自身が自分は女で、女らしくありたいと思っている、恋愛対象は当然男性に恋愛感情を抱くものである、これが普通と世間ではされているわけです。女といえばこういうもので、これ以外はあり得ないと思われているから、性別欄は、女か男の二者択一ですんでしまうわけです。もちろん、これと逆パターンが普通の男。男として正常なのがこうだと言われているわけです。

しかしながら現実は、そう単純にはまとまらない。例えば男として生まれて、自分自身べつに男だし、男らしく、男だから男として生きていきたいと思っているけれども、例えば、恋愛対象がやはり男の子というような場合が、当然ある。これがじつは男性の同性愛で、ゲイとか呼ばれるわけです。女性の同性愛、いわゆるレズビアンの場合は、身体は女で、自分の意思としても女でいいと。女で生まれて女として生きていって、でも好みのタイプがやはり、かわいい女の子ということです。つまり同性愛の核心は、この性的指向、恋愛対象の部分が、世間が措定する“普通”と異なる点だと言ってもいいでしょう。

インターセックスは、身体が男でも女でもない。遺伝子がXXとXYが正常とされているのですけれども、数が多いから正常で、そうでないのが異常というのが、ある種の多数派の基準なのでしょうけれども、とにかくXXYとかXOとか、異なる遺伝子系の子どもが生まれることがあって、それをインターセックスの子どもと呼んだりするわけです。言ってみれば、もう身体自体が男でも女でもないというケースが、このインターセックスです。ただ現実には、戸籍とか、出生届は男か女か。インターセックスの場合は、いちおう保留して出すことができますけれども、最終的に出生届上の性別を、戸籍制度上、男か女かどちらかに決めないといけない。だから性別は女と男だというのは、じつは社会的な約束ごとなのですね。身体の性別はじつは多様なのに、そのありのままを受け止めず、社会的に性別は2つしか認められていないのはいかがなものなのだろうかというのが、

このインターセックスから提起される問題なのではないでしょうか。

トランスジェンダーの場合は、一般に性同一性障害と診断される基準は、身体はインターセックスではなくて、いわゆる正常な男か、あるいは女ですけれども、例えば身体は男だけれども、本人の気持ち的には女だというケースですね。これが性同一性障害と診断される基本の基準になります。だいたいトランスジェンダーは、こういう動機で性別を変えていることが多いです。身体を基準に割り振られた性別の枠内では、望みが叶わない。反対側の枠内なら、自分の理想が通りやすい。私の場合、本人の気持ちとしては、やはり女のほうがよかった、女であるほうがうまくいくということですね。でも身体が男で、そこが食い違っているが故に、いろいろ社会の約束ごととの違いが生じて、いろいろな問題が起きたりするのが、この性同一性障害と言われたり、広く言うとトランスジェンダーの人が直面する問題なのですね。

同性愛の人というのは、例えば身体は男で、気持ち的にも男でべつに問題はなかったので、そこが違うところだったりします。よく同性愛とトランスジェンダーを混同する人が世間にはいますが、大いに誤解です。じゃあ、トランスジェンダーの性的指向はどうなのかというと、これはもう人それぞれです。私の場合は女ということにまぁなりますけれども、もちろん男の子がいいという人もいます。

◆「性別」ってふたつだけ？

「あなたの性別は？」

「男女」におさまらないセクシュアルマイノリティの基礎を確認すると…

	女　　男
身体を基準に付与される性別	←－－－－－－－－－＊－－－－－－－－－→
本人の意思に基づく性別	←－－－－－－－－－＊－－－－－－－－－→
恋愛対象にかかわる性別(いわゆる性的指向)	←－－－－－－－－－＊－－－－－－－－－→

それで、この「あなたの性別は？」の表ですが、ここまでを踏まえて自分はどうかなとかマルを付けだしたら、真ん中へんにもいくらでもマルが

付きますね。例えば自分の恋愛対象はちょっと少年のような女の子だから、このへんかなとか。本人の意思に基づく性別についてもですね、私なんかもさしあたりいちばん女寄りにマルしましたけど、クルマの運転の様子とかいろいろ、仮に勘案しないといけないとすると、いささか怪しくなってきます。身体なんかも、遺伝子で厳格に言うと男ですけれども、子どもの頃から力も弱かったしとかいうと、ちょっと女側に寄せたりさせられなくもないですね。

そうなると性別というのは、じつは非常に多種多様、人それぞれということがわかってきます。「身体を基準に付与される性別」「本人の意思に基づく性別」「恋愛対象にかかわる性別」という、この3つの要素について、とりあえず単純に女か男かと言っただけでも、2の3乗で8種類の性別があることになります。とても女か男かの2つというのは強引だということがわかりますし、真ん中へんにマルが付く話を考えだすと、要するに真ん中は無段階にマルが付けられますから、まさしく人によって違うわけですね。すなわち、性別の全体像、その人のセクシュアリティの全体像というのをこれで考えると、まさしく性別は人の数だけあることになってしまうので、そういう意味では、今日の冒頭で「同じ性別の人はどれくらいいますか」とやりましたけど、これで考えると、言ってみれば自分とまったく同じ人というのは、まあ1人もいないです。性別の数は、言ったら60億通り、世界人口の数だけあるんだとしたら、それはそもそもカテゴリーとして成立しないということも言えてくるのではないかと思います。

さて、いろいろお話ししてきましたが、このあたりまでが基本編と言えるでしょうか。

従来はセクシュアルマイノリティというのは「変態」と一蹴されていたけれども、それが人権問題として俎上（そじょう）に上ってきたのが最近です。今までは思いもよらなかった、人知れずしんどい思いをしてきた人のことを、これからは念頭に置いて社会を作っていく、その端緒にはついたんですね。

ただ、マジョリティの側が、あくまでも自分たちが普通だとして、でも普通でない人たちの人権も考えてあげましょうというのは、本当に人権な

んでしょうか。「変態」で一蹴されるような時代よりは進んだとしても、そういう人もいるという受け止め方で終わってしまうと、結局は同性愛は、ある種の特別なセクシュアリティだし、トランスジェンダーは、いつまでたってもかわいそうな障害者でしかないわけですよね。

それで終わらないためには、やはりこの先へ進まないといけないわけです。

「性の多様性」をおおらかに認め合える社会のために

◆同性愛・異性愛の「同性」「異性」っていったい？

セクシュアルマイノリティというのは、普通のマジョリティがあって、それに当てはまらない一部の人がそういうふうにいるというのが、例えば性的指向で言うと、同性愛か異性愛かというカテゴリーになってくるわけですね。従来、同性愛者が社会のなかで見えなかった、不可視化されていたなかで、いや、異性愛ばかりではない、こういう同性愛者も世の中にはたくさんいるんだというのを訴えるためには、一種の運動体の戦術としては、異性愛に対して同性愛の人もいるよという持っていきかたをするのは、あながち悪くはないと思うのですけれども、例えば、では同性愛というのは、そもそも何なのかといったとき、何なんでしょう。

私のようなトランスジェンダーで、性的指向が女ですといったときに、これは同性愛なのか、異性愛なのかというのがまず１つの問題ですよね。結婚して子どももいますように、役所に行って婚姻届とかも、身体や戸籍を基準にすると全然オーケーなのです。ただ、現在の家庭の実態を見ると、どちらがお母さんなのという感じになってくるわけで、外見的には同性愛に見えたりもするんですね。

あるいは誰かが、例えば性的指向が女ですと言ったときに、ではその「女」というのは、何がどうなっていたら女なのかと。例えば相手の身体が女だったらいいのかとか、相手の本人のありようが女だったらいいのかとか、両方とも女でないとだめとか、いろいろと細かいことを言いだすと、これはきりがないです。

ではこう考えるとどうでしょう。現在は性別二元制の下で、男と女を分けています。しかも異性愛主義ですから、分けられたこちらとあちらでお見合いというか、パートナーを選び合うというルールを設定してものごとを見るから、好みのタイプがあちら側にいない、あろうことか、こちら側にいるという人は同性愛となってしまいますけれども、そもそも誰がいいかなと自分に合った人を探すときって、誰でもその「自分に合った人」を探しているわけですよね。いわゆる異性愛者であっても、異性なら誰でもいいわけではないわけです。

となると結局、自分が好きになるのは、自分の好みのタイプの相手を好きになっているというのが、この真実ではないでしょうか。要するに、誰でも、どんな人でも、性的指向は自分の好みのタイプの相手に向かっているわけですよね。その自分の好みのタイプの相手が、たまたま世間の基準で異性の範囲に収まっていると、異性愛だからとりあえず普通ということで問題が起きないから、当然深く自覚もされない。たまたま自分の好みのタイプが、世間の基準では自分と同性になってしまうという場合に、同性愛と意識せざるをえなくなるだけではないかと。

好みのタイプというときは、当然いろいろな要素があって、単純に言うと例えばちょっとぽっちゃり系がいいとか、あるいはいや、やせ形だとか、丸顔がいいとか、垂れ目がいいとか、例に挙げるとしょうもない例しか出てこないですけれども、そういう好みのタイプとして勘案する要素というのは、実に多岐にわたっているはずなのですけれども、そのすべてに先だって、まず相手を女か男かに分けるというのが、ものすごく、二元的な性別の制度にだまされてというか、性別の制度を自分自身が受け入れているために、まず異性か同性かで分けてしまうのではないかなと。

そうではなくて、じつは誰もが好みのタイプの相手を好きになっているだけだと考えれば、異性愛者と同性愛者の、その人本人としての違いはじつはないわけですよね。社会の基準がその対象を女か男かで分けることによって、しかもそれに恋愛・セックスは異性ですべきという規範を適用するが故に、好みのタイプがある特定のカテゴリーに収まる人を同性愛者とカテゴライズ可能にしているのではないでしょうか。

ちょっと余談ですけれども、若い方も多いので、よく異性にもてなければというプレッシャーがありませんか。女としては、かっこいい彼氏がいるほうが偉いような風潮がありますし、男の子社会にはさらにそのプレッシャーが強くて、かわいい彼女がいる、モテ男ほど格が上、あるいは、極端な話、セックスした相手の女の子の数が多いほど自慢できるみたいな風潮があります。だからこそ何かみんな性体験を急いだり、そこまでいかなくても異性にもてるように男は男らしく、女は女らしくしようというようなプレッシャーを自ら身に付けてしまうようなところがありますよね。

石川大我さんという、ゲイの方で本も出している方が、「いやもう男らしさや女らしさというのは、あれは異性にモテるために必要なものなんですよ」みたいに、さらっとおっしゃっていますけれども、なかなか深いですね。ですから、異性にモテるほうが人間として価値が上というような強迫観念をうまく横にどけることができると、人間関係の幅が広がる可能性があるのではないかなと思います。

実際、現行の男と女の枠組みは、けっこうきついですよね。私も結局いまは女性とみなされる姿で、女性と同性どうしのような感覚で話せるようになりましたけれども、高校の頃は男の子だったから、女の子とは異性としてしか接することができなかったということがありましたが、そもそも男女間の単なる友情は、なぜそういう不可能性が高いのかというと、これはまたひとつ議論に値するテーマだと思います。

男女が仲良くしていると、ただの友だちとは、われわれを含めてなかなかそうやって見ることができないですが、異性愛主義というのは要するに同性愛否定で、恋愛・セックスは男女間でというのと同時に、男女間なら恋愛・セックスだろうという思い込みでもあるのかなと。だから、そのへんを外していろいろな人と接することができると、いまとは違う人間関係の可能性も広がるのではないかなと思います。

そういうことで、この性的指向というのは、みんなが好みのタイプを好きになっているのだとすると、かなり人それぞれ度が高いというか、性別というカテゴリーに用いる根拠というのが、かなり薄弱になってくるわけです。

◆冥王星は惑星じゃなかった

では身体や、あるいは本人の意思、いわゆる心の性別と言われるものについてはどうでしょう。ちょっと見ていきます。

まず身体。身体の性別というのは、生物学的にこれは動かし難い真実という考え方がありますよね。そもそもジェンダーという概念は、フェミニズムの歴史のなかで出てきたもので、そのフェミニズムの運動の成果と、ジェンダー概念が出てきた歴史や背景は、もちろん否定されるべきではないのですけれども、あれはそもそも生物学的な性別が自然科学的に決まっている事実で、もう宇宙の真理だから動かせないけれども、いわゆる性差とか、性役割というのは、それだけではなくて、もっと社会的、文化的に強化されている部分があるのではないか。その部分はジェンダーだという理屈が1つ、ある種あったと思うのです。

自然科学の領域というのは、文系の人間はなかなかツッコミが入れにくいのですけれども、去年（2006年）わかりやすい例で、冥王星が惑星じゃなくなった事件というのがありました。あれは冥王星が去年急に丸かったのが四角や三角になったわけではないですよね。冥王星は何も変わってはいないのに、単に天文学会が惑星の基準を会議で変えた。そのことによって、冥王星が惑星ではなくなったのですね。このように学会の基準で自然科学的な事実の解釈がいかようにも変化するのだとしたら、結局そんなものは人間が決めているわけで、つまるところ自然科学上の事実というのも、社会や文化の影響下にある。

ということは、それを性別に当てはめて言うと、結局は、性別は全部がジェンダーだったということになります。冥王星が惑星か否かと同様に、こういう身体は女、こういう身体は男という基準さえ変われば、性別の概念というのも変わる可能性がある。XXとかXYとか、オチンチンがどうなっているかとかいう事実は事実としてあるにしても、それに対して、だから男だとか、だから女だという部分は全部解釈だとすると、身体の性別というのは、思った以上にあいまいだということです。結局は男とはこんなもの、女とはこんなものというのは社会的、文化的な一種の創作で、人間がそうやって決める以前には、男とか女とかいう概念は自然にも存在して

いないということにもなりますね。このあたりは、冥王星が惑星ではなくなる以前から、ジュディス・バトラーなどが、かなり言っているようです。ジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』（青土社 1999年）などにおける考えの要諦は、こういうことですね。

バックラッシュ派にとっては、こういう考えは都合が悪いのかもしれません。それにバックラッシュ派であってもなくても、ここまでの観念に至るのはなかなか難しいかもしれません。男は男、女は女にとらわれていると、なかなかできない発想で、私もこれに至るまではかなり紆余曲折を経ないといけませんでした。

◆心に性別はあるのか

さて、こうなると性別というのは、もはや本人が、自分は男とか女とか思っていることしかよりどころがないよという主張もここで出てくるのですけれども、では心に性別はあるのかというのも、問題になってくるわけです。心に性別はあるのかというと、当然、一般に性同一性障害をみんなに理解してもらうときには、身体の性別はこうですけれども、心の性別がこうなんですよと、それで納得してもらう部分は多々あります。とりあえず性別は男と女しかないと思っていた人にわかってもらうには、まずそこから始めないと話が進まない面もあります。

でも、そういうなかで、心の性別という概念が逆に再生産されている状況があるんじゃないでしょうか。例えば私なんかも、携帯電話をこういうピンク色を選んだり、あと手帳なんかもあざとくピンクですね。ピンク色はけっこう好きです。ピンク色というのは、世間では女らしい色となっているので、それをある人が好きだと、ああ、何か女らしい人だなとなるわけですけれども、その女らしいという解釈は何なのかといったときに、それをそのピンク色が好きな人の心の持ちようを、心の性別を女と言っていいのでしょうか。ピンク色が好きだということをもって、それを女らしい心の性別と言うのが、先ほどの身体の話以上に恣意的というか、社会文化的な解釈にすぎないのは明白です。だから、結局ピンク色が好きという事実は、単にピンク色が好きというそれ以上でもそれ以下でもない、ただ単

なるそういう事実でしかないと。心のなかというのは、結局色もかたちもないわけですし、それをどう解釈すれば心の性別が男か女かと言えるかというと、そのあいまい度たるや、ものすごいものがありますよね。近年では脳のCT画像の男女差なども言われてますが、それがもたらす男女のちがいというのもまだまだ研究途上の推測の域は出ていないでしょう。

こうなると、先ほども言いましたけれども、性別を女か男かで二元的にとらえるというのは、かなり社会的に約束ごとに従って人が誘導されている結果に過ぎなくて、その人その人本人のありようというのが単純に女か男かでは割り切れないものであって、そこをあえて割り切ろうとする、いわばオチンチンがあるから男らしくしなさいというのは、かなり暴力的な社会抑圧装置であるということが言えるのではないでしょうか。

◆ロビンソン・クルーソーは女か男か!?

次に、ロビンソン・クルーソーが女か男かというネタ振りがありますけれども、どう思いましたか。ロビンソン・クルーソーは、無人島で生き延びた人ですね。ロビンソン・クルーソーは、どうでしょう。男でしょうか、女でしょうか。

○参加者　ちょっとよくわからないです。

○佐倉　ああ、さすがよく勉強されているので、逃げましたね。まあ一般的には男だろうという答えが出る場合がけっこうあるのですね。なんでですかと聞いたら、映画とかで観たときに男の人だったからということになるのですけれども、それはつまり映画で観たから、そこで「ああ、男の人だ」という解釈が発生したから男の人なわけで、実際にロビンソンが無人島で独りでいるときは、誰もロビンソンを見て、ああ、男の人だと思う人がいないわけですね。そのときにそのロビンソンの性別の意味というと、一般的に言うと、男性のほうが筋力があるから、サバイバル生活をしやすいだろうとかいうのはありますけれども、それも結局ロビンソンを見ている、映画を観ている側の社会のなかの知識で、他の男性や女性と比較して

言っているだけで、ほんとうに無人島に独りだけいる人にとっては、筋力が自分は強いか弱いかの違いでしかなくて、性別ではないわけですね。というふうに考えると、無人島に独りで住んでいる人には、性別はないという言い方ができるのではないかなというのが、このネタ振りでした。

次にちょっと写真を見てもらいまして、まずこちらの、向かって右側のお子さまは男の子でしょうか、女の子でしょうか。

○参加者　女の子。

○佐倉　女の子。女の子というのは、なんでだろうと思いますか。

○参加者　ピンクだから。

○佐倉　ああ。はい。こちらはどうでしょう。右側のお子さま。

○参加者　男の子。サッカーボールを持っているから。

○佐倉　おお。ということで、だいたい聞くまでもなく、これはもう写真が出た瞬間、あっ、女の子と男の子だなと、ピピッと認識されてしまいますよね。当然ながら、わかるわけです。ただ、だいたいバックラッシュ派が言うのに、男と女は違うんだからという、その違いのおおもとはというと、オチンチンの有無だとしたら、それはこの画面でわかりますか。映っていないですよね。だから、本来は服を着ていればわからないはずの性別が、着ている服でわかるというのが、いかにも性別はジェンダーだという話だったりします。要するに、着ている服とか髪型とか、全体的な雰囲気とか、そういうものを社会に向かって表明しているからこそ、男の子だなとか、女の子だなとか言えるわけですし、逆に言うと、これはロビンソン・クルーソーと一緒で、している格好をまわりが社会の基準に照らし合わせて、女だ、男だと判断しなければ、単にそれぞれ、この子とこの子でしかないわけですね。

結局、どうしていまの絵を見て一瞬で男の子か女の子かがわかるかというと、そういう、それぞれがそれらしいジェンダーの記号を身にまとっていたからですね。そして、それを周囲の他人が解釈をした時点で、周囲の他人との関係性が発生する。その過程で、解釈した他人が、「おっ、僕、どこ行くの。サッカーか」とか、「あっ、お嬢ちゃん、カワイイねぇ」とか、例えばその解釈した他人が相手に対する扱いを変える、対応を変える。そこにこそじつは性差が発生しているわけですよね。

他者との関係性のなかで、相手が男か女かによって相手の振る舞いが変わる、それによって自分のリアクションも変わる。そういう社会のなかでの相互作用によって、男か女かの違いが発生する。そういう意味では、性別は結局、性的指向というのは人それぞれでしたし、身体の基準というのも、けっこう怪しいものでしたし、心の性別なんていうのも一種の方便にすぎなかったけれども、何か私たちが性別とか性差があると感じているものがあるとすれば、それは社会にあるということができるのではないでしょうか。

個人の資質のなかに何か性別があるのではなくて、性差がどこにあるかと見てくると、こういう他者とのかかわりのなかにある。だから、ロビンソン・クルーソーには性別は関係ないというわけです。

先ほどからのこの男の子と女の子ですけれども、ほんとうはオチンチンが映っていないので、生物学的な厳密基準での性別はわかりませんけれども、着ている服とかで判定されました。それを見てわれわれは解釈をするわけですけれども、逆に言うと、着る服—をはじめとする外見の操作—というのは自分が相手にどう見られたいかという表明でもあるわけですね。だから、女の子として見てほしい、女の子として扱われ、女の子のほうに所属したいと思う人は、ある種、相手から女性だと見える範囲の格好をして、それをアピールしないといけなくなる。自分が男で、男だと扱われたければ、世間でいうまっとうな男の範囲から逸脱しないような外見を整えないといけない。

本人が自分はこうだと思う服装をする。それを相手が解釈して、それに応じた性差を含んだ対応をする。そういう関係性のなかから、性別という

のが相互作用的に再生産されているというメカニズムがありまして、性別、性差といったときには、そのあたりにもう少し着目されるべきではないかなと思います。このへんの相互作用の話の詳細は、江原由美子さんの『ジェンダー秩序』（勁草書房 2001年）という本のなかに、きめ細かな説明がありますので、よろしければそちらも参照してください。

こう考えてくると、トランスジェンダーがよく「男だけど女になりたい」とか、「女だけど男になりたい」とか言う、それもじつは便宜上そう表現できるにすぎなくて、本当になりたいのは単に“なりたい自分”なんじゃないでしょうか。「女」や「男」ではなくて。つまり、そうなりたい自分、こうあるべき自分に、なった後の自分を、結果的にまわりが見て、「ああ、それなら男」とか、「ああ、それなら女だ」というように判断するにすぎないんですね。

本人の意思に基づく性別区分のことを、心の性別とか、あるいはジェンダーアイデンティティ、性自認と呼んだりします。この性自認というのが成立するのも、やはり世の中に二元的な性別観が強固にあるが故に、先に人間が自分の性別を考えてしまうから、アイデンティティにジェンダーが接頭するんじゃないですか。アイデンティティというのは、社会のなかでの自分の位置付けはこうだと思う心のはたらきだというのが、エリクソンの理論の要旨ですけれども、これも結局アイデンティティはアイデンティティでしかなくて、そのアイデンティティのありように対して、これも社会が、それなら女のほうに入っていますとか、それなら男のほうだなどと意味づけしているだけではないかと。

通常は性自認というのは、よくセクシュアルマイノリティを語るうえでの１つのキーワードになるのですけれども、こうなるとこの性の自認というのも怪しいもので、言ってみれば他者が判断しているだけだとしたら、自認ではなくて他認、性他認だなと思います。「性他認」は、じつは私のオリジナル用語で、10年後の大学院生とかが、性他認は佐倉智美さんが言いだしたんだねとか、話してくれないかなという野望がひそかにあるのですけれどもね。言い換えると、こういう自分なら他者は女と見るだろうななどという性他認の予測を先取りして自己判断するのが、性自認の正体で

はないかなと思います。

◆「女」「男」のとらわれから自由になれば

というようなことを話してきましたが、性別にとらわれて、女か男かというのをどうしてもわれわれは考えてしまいますけれども、もうちょっとそのへんから自由になると、じつは誰もがもっと気楽に生きられるのではないかなと。現状では、あいだにベルリンの壁があるわけですね。世界があって、いまは男の国と女の国に分かれています。男の国に生まれたら、もうずっとこっちで暮らさないといけない。もうこっちの男の国のものしか消費できない。男の国のなかでしか生活できない。女の国に生まれたら、やはり女の国で暮らさないといけない。男の国に生まれたけれども、あちら側に行きたいという場合は、壁がありますので、決死の覚悟で越えないといけません。見つかったら撃たれたりするという意味でも、ベルリンの壁なのですけれども、本物はとっくに崩壊しましたので、崩壊させましょう。

崩壊させると自由に通行できます。だから、例えばこのへんに生まれたけれども、こちらにも行きたいし、こちらでも暮らしてみたいし、結局生まれはこのへんですけれども、世界を見渡してみたら、自分にとって居心地のいいのはこのへんだったというようなことがありますよね。当然、かつての境界線をまたがっていても、この壁がなければ自由に行き来して選べます。

だから、いま男らしいと呼ばれていることや、女らしいと呼ばれていることも、それぞれが男専用、女専用だと、すべての人がじつは選択肢が半分になってしまっているわけです。そうではなくて、いま男らしいと呼ばれていることも、女らしいと呼ばれていることも、本人が自分の好みとか、才能とか資質とかに応じて自由に選べる。身の回りのもの、日用品、服とか、いろいろなグッズとか、あるいはそのライフコース、進路であるとか、仕事であるとかいったものを含めたもの。あるいは恋愛対象、性的行為の対象を含めて、自分の好みに合ったものを、「男はこう、女はこう」にとらわれずに選ぶことができれば、誰もが自由に、自分に合った暮らしがで

きるのではないかなと思います。

だから、いちおう先にまとめの話をしておくと、言ってみれば、性別で分けるより、ありのままのその人をそのまま認める。そうすれば、セクシュアルマイノリティといま呼ばれているような人に限らず、誰もが自分の好みや才能に合った暮らしができるから、選択ができるから、みんな生きやすくなる。

さらにそこまで考えると、じつは要するに誰もが自分の好みに合った選択をしているだけだということは、いまマジョリティと思っている人も、マイノリティと呼ばれている人も、べつに違いはなくて、みんな一緒で、みんなが普通ということにもなるのではないでしょうか。

先ほどのベルリンの壁をもうちょっと具体的に言うと、クリスマスの前とかになると、こういうおもちゃ屋のチラシが出てきて、例えば「ケンタくん、何がほしい。サンタさんに何をお願いするの」「僕、このお姫さまドレスセット」とか言ったときに、「男の子なのに、どうしてかしら」となるから、性同一性障害なんですよね。べつにそこで、「あ、そうなの。じゃ、サンタさんにお願いしておこうね」と。逆に、「ミキちゃん、何が欲しい」「この合体ロボットセット」「女の子なのに、どうしましょう」とならずに、「あ、そうなの。じゃ、買ってあげるわね」と進めば、さらっと流れれば、べつに誰も困らないし、何も問題が起きないわけですよね。そこを男、女の基準に合わないから変だ、おかしいとわざわざ取り上げるから、性同一性障害が「障害」になってしまうわけです。

その場はよくても、例えば男の子らしくない男の子がそのまま大きくなったら、将来困るだろうと心配するのも親心ですけれども、男の子が男の子らしくなくて、何が困るかというと、結局まわりが変に思うから本人の不利益になるんじゃないかという予想ですよね。だから、これもまわりが変に思わなければ、やっぱり問題はないわけですね。

先ほども言ったように、性別で考えずにありのままのその人がオーケーになれば、じつは誰も何も困らないということが１つの見方としては言えるのではないでしょうか。

もう時間ない、……過ぎてますね。すみません、急ぎましょう。

◆「戸籍の性別変更はゼヒ必要」なのか？

戸籍の性別変更の問題ですけれども、いわゆる「特例法」―性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律― が、2004年から施行されています。一定の要件を満たせば戸籍の性別が変えられるようになったわけで、画期的といえば画期的なのですが、この「特例法」という名前は、性同一性障害者はあくまでも特別な病気の人だというニュアンスが滲んでるようで、ちょっとイヤですね。

それに性別変更が認められるための要件のほうも、いわばかなり保守的で、あくまでも男は男らしく、女は女らしくという枠組みを維持できる範囲を固守していると指摘せざるをえないです。つまりオチンチンがある女の人がいてもエエやんとか、夫婦が女どうしになってもかまへんがなとか、ウチはお父さんが女の人やけど何か？ というような考え方は、すべて排除されちゃうんですね。性の多様性をおおらかに認め合う……とは対極のスタンスです。スミマセン、このへんの詳細は『性同一性障害の社会学』の本の中に、短くまとめた小論も載録されているので、そちらを参照してもらうことにして時間節約しましょう。

もう１つ、「特例法」を適用して戸籍性別を変えようというのは、どういう発想かというと、例えば私が健康保険証を持って、男と書いてあったら嫌だから、見た目と書類を一致させたいということだけれども、まあ、見た目が女の人がじつは男とわかって差別されたりしないようにということなんですけれども、これも言い換えると、見た人が差別しなければ、必要がない変更ということも言えるわけですね。べつに書類上の性別を変えなくても、「ああ、そういう人なんだ」とあっさりそれが認められる世の中なのであれば、じつは変更する必要はないということなのです。

◆FtMとMtFはどっちが得か

最後になりました、FtM（Female to Male 女性から男性へ）とMtFはどちらが得か、は話す時間がぜんぜんないのですけれども、簡単に言うと、これはどちらが得か考えても、当事者には全然利益がないです。どちらもしんどいし、どちらもそれぞれ有利な点はあるでしょう。

ただ、例えば先ほど言った、女性が男物の下着を買いに行ってもオーケーという点から言うと、トランジションの初期の段階ではFtMのほうが多少楽というのはありますね。初期のFtMが、例えばユニクロで適当な服を買って着ても、とりあえずはボーイッシュな女性ということですんでしまう。MtFが、もうスカートを履けば即変態なのとくらべると、周囲に波紋を呼ぶ度合いは2桁くらい少ないかもしれません。ところがある時期を過ぎると、例えばもう男として暮らしているFtMの人が就職したときに、同僚の男性とトイレで立ちションが一緒にできないから困るというような問題は増えてくるかもしれないというのがあります。少なくともそのくらいの段階になると、MtFのほうが相応に居心地のいいポジションを確保しやすいかもしれないです。

なんでそうなるのかというと、思い切りかいつまんでしまいますが、それは結局、イブ・コゾフスキー・セジウィックが言うホモソーシャルの構造を引っ張ってきて当てはめると、ある種わかりやすいです。つまり、男性の領域というのが公的領域で特権化していて、そこでは男らしい男が社会の構成員なわけですね。だから、男性はその男らしい男であるべきところから、もうちょっとでも男らしくなくなると、すぐ転落してしまう。特権をすべて剥奪されて外へ放逐されてしまうわけですね。だからこそ男性は自分を男らしく保とうときゅうきゅうとして、そこから降りられないんだという話もあります。当然、だから、そんなスカートを履きたい男なんていうのは、即追放になります。

逆に外側というのは、つまり公的領域以外の場で、男らしい男以外、つまり一般の女性も含めて、男らしい男以外の人は全部外側にいるので、例えば女性が男物を着ても、あくまでもその外側のなかで何かしているだけなので、特に社会的な制裁はないと。

その1つのあらわれとして、例えば女性の男装と、男性の女装への社会的な、批判的な視線に違いがあるのは、そういうところもあるのではないかなというと、じつはこれは社会における性差別というか、男女をめぐる社会構造にもつながっていく話かなと。

だから、この問題を掘り下げていくと、まだまだけっこう奥が深いし、

このセクシュアルマイノリティのことから話は始まりましたが、結局それは社会全体の性別、性差、いわばジェンダー、女性問題、男性問題、そういったものにつながる話で、じつはみんなに関係がある話だったのではないか。そのあたりを踏まえながら、例えば各自の研究関心領域に参照しながら、いろいろ研究を深めていくと、また新しい見え方をするのではないかなと思います。

ということで、長時間すみません。とりあえず私のほうからは終わらせていただきます。

【参考文献】

佐倉智美　1999『性同一性障害はオモシロイ —性別って変えられるんだヨ』現代書館。

———　2002『女が少年だったころ —ある性同一性障害者の少年時代』作品社。

———　2003『女子高生になれなかった少年 —ある性同一性障害者の青春時代』青弓社。

———　2004『明るいトランスジェンダー生活』トランスビュー。

———　2006『性同一性障害の社会学』現代書館。